

## 関節の腫れ ～関節炎について～

喜久生健太

きくいけ整形外科

今日は関節の腫れ関節炎についてお話しさせていただきたいと思います。

皆さん、激しい運動の後や登山の後などに膝の関節が腫れたなんていう経験されているのではないかと思います。それが関節の炎症、すなわち関節炎になります。関節炎には、そのような使いすぎによる関節炎のほかに、尿酸やピロリン酸カルシウムなどの結晶が関節の中に溜まって起きる結晶性関節炎、病原体感染が原因で起きる化膿性関節炎、そして自分の体を自分の免疫システムが攻撃してしまう自己免疫性関節炎があります。それぞれの関節炎には、急性のものと慢性のものがあり、関節炎の持続時間が長さで区別されませんが、関節の中や関節の近くの怪我によって、関節内に血液が溜まっても、関節は腫れますが、これは、関節内血腫や関節内出血と違って、関節炎とは異なります。

代表的な関節炎を列挙します。

まず、急性の関節炎ですが、一番多いのが、外傷性関節炎で、やや過剰な運動によって発生するものです。腫れ以外に、熱感があることはありますが、赤くならないのが特徴です。多くの場合は、特に治療を行わなくても、自然に治ります。次に多いのが、結晶性関節炎で、(別名 結晶誘発性関節炎ともいいますが)、男性に多い痛風性関節炎、高齢の方に多い変形性関節に伴う偽痛風性関節炎があります。痛風の原因となるのが、尿酸結晶で、偽痛風の原因は、ピロリン酸カルシウム結晶です。尿酸は、関心の高いかたは、御存じだと思いますが、食事やお酒などから体に取り込まれたプリン体が、体内で代謝されて生じる物質です。結晶性関節炎は、関節の腫れ以外に、熱感を伴うことが多く、ほとんど症例で発赤を伴います。治療は、急性期の痛みが強い時には関節内注射、そうでないときは、炎症をさげ、痛みをやわらげる抗炎症剤の内服を行い、その後、関節炎を再発させないために、尿酸代謝薬の内服や、持続的に抗炎症剤の内服を行います。忘れてはならないのが、関節周辺の怪我や関節注射、関節手術の後に発生する、化膿性関節炎で、激しい痛み、熱感、発赤をとともないです。速やかに治療を行わないと、関節軟骨が再生できないほど壊れてしまうため、すぐに病院で治療を行う必要があります。原因は、細菌の感染で、治療は通常、関節の洗浄が必要で、関節穿刺や、切開、手術治療などの外科的処置を行い、抗生剤の点滴や内服により治療します。そのほか、全身のウイルス感染に、関節炎を伴うものがあり、インフルエンザ感染でも、関節症状が発生することがあります。

慢性の関節では、主に加齢により生じる変形性関節症による関節炎、そして自分の体を誤って自分で攻撃してしまう自己免疫性の関節炎などがあり、自己免疫性関節炎として、有名なものに関節リウマチがあります。変形性関節炎による関節炎では、腫れのみを認めることが多く、たまった関節液を穿刺、吸引しても、繰り返し貯留してしまうことがあります。

す。これは、水がたまる原因を治療することが困難なためで、決して、水を抜くと癖になるわけではありません。関節周囲の筋力を強化したり、脚全体のバランス調整をするなど、あきらめずに、原因に対する対処が大切です。関節リウマチは、古代からよく知られている関節の病気で、進行性に全身の関節が破壊されてしまう病気です。近年、関節リウマチの病態解明や治療薬の開発が進み、薬を使うことで、関節破壊の進行がおさまり、治療を継続することで、通常の生活ができるようになってきています。早期発見、早期治療がとても大切な病気です。リウマチは、手指の関節炎、関節の腫れから発見されることが多いので、特に朝に手がこわばる、全身の関節が腫れるなどの症状があれば、速やかに病院を受診し、リウマチの検査を受ける事をおすすめします。ただ、手の指でも爪に一番近い関節が、骨のように固く腫れてくるのは、ヘバーデン結節という病気で、関節リウマチと異なる病気です。

その他、結核、関節内の腫瘍による関節炎などもあり、数日で治らない関節の腫れ、関節炎が発生したら、整形外科外来で検査、治療を受けるようにしてください。